

ASEAN グローバルプログラム

中村 悠大
Yuta NAKAMURA
情報メディア学科 2年

1. はじめに

2017年8月29日から9月7日までの10日間、ベトナムのハノイ、シンガポールで ASEAN グローバルプログラムに参加した。ハノイについてからの5日間はハノイでの企業訪問、ハノイ工業大学の学生と共同 PBL を行った。シンガポールでは南洋理工大学を訪問し研究室などを見学、現地で働くビジネスパーソンの方々とは交流、加藤氏の講演に参加した。本報告書では特に南洋理工大学でのプログラムについて報告する。

2. 参加の目的

私が ASEAN グローバルプログラムに参加した目的は三つある。一つ目は自分の英語の実力を知ること。私はもともと海外に興味があり、将来的には海外に住みたいと考えている。しかし、自分は英語が大の苦手であるため現地で働いているビジネスパーソンの方々がどのように英語を勉強して、現地でどのような生活をしているのか聞き自分にどのようなことが必要か知りたかったからである。二つ目は、海外の文化は日本とどのような違いがあるのかということ。私は海外にあまり行ったことがないため、日本にはないその国独特の文化に興味があった。テレビやインターネットによってそのような情報を得ることは可能であるが、実際に現地に行くことにより自分の常識であると思っていたことが違うのだと肌で感じるができることと、日本に居ては絶対に得ることのできない最新の情報なども得ることができるのではないかと思った。三つ目に海外の大学はどのようなものなのかを知りたかった。世界の大学ランキングを調べても日本の大学は100位以内に2校しか載っていないのに対し、訪問先の大学は

トップレベルに入っているとのことだった。海外のキャンパスや授業、研究室はどのようなものなのかを今回のプログラムでは見学できると知り興味がわいた。

3. 南洋理工大学

私たちはシンガポールに着いた日の翌日に南洋理工大学を訪問した。大学を訪問したときに衝撃を受けたものがいくつもあった。まず初めに驚いたのは大学の敷地の広さである。大学の敷地がとにかく広く、敷地内を移動するために生徒たちはバスを使っているほどであった。バスは敷地内を走っていてキャンパス内にある寮でさえも校舎までが遠いため、バスを使って登校している生徒も見かけることができた。また敷地だけでなく建物も大きく、中にはレストランや売店はもちろん、スーパーマーケットまでもが完備されてる建物があった。スーパーマーケットには普通の街にあるものと同じように日用品から食料品までのさまざまなものが売っていて、ショッピングモールと勘違いするようなものであった。

私たちは研究室を見学させてもらった。初めに行ったのが車について研究している場所であった。ここではカーボン素材などを使ってどのくらい車体を軽くできるかや空気抵抗をできる限り少なくして速度の出る車などを開発、研究しているとのことであった。エンジンなども自分たちで作っているように、学生たちのアイデアを自分たちの手で形にしているように思えた。またその車を使ってレースに参加していて多くのトロフィーも飾ってあった。

次に見学したのが神経の信号を受信することによって自分の動きをリアルタイムでコンピュータ上に映すことのできる技術であった。その機器はつける場所によって腕や指、その両方を画面に映すことができる。自分はこの技術を見たときに、これはロボットの動きを作るときに役に立つと思った。それは、この機械を付けた人間に物を取る動作などをしてもらい、そのデータをロボットの動作に読み込ませることでロボット特有のカクカクした動きを少な

くできると思った。これによって誤差を少なくすることや、ロボットが相手であるという感覚を少しはなくせるのではないかと思う。現地の学生はこの機器を読み込むだけでなく、出力することを可能にすることで、腕が動かすことの出来なくなった人々に新たな義手として使えるよう研究していると話していた。この他にも左右のアームの力加減を画面に表示するものや、3D プリンターを使って靴底を作るなど面白そうな研究がたくさんあった。

最後に見学させてもらったのが図に表したようなシンガポールの玄関口であるチャンギ国際空港の管制塔を模して造られたシミュレーションシステムだった。ここで昼や夜、離陸や着陸などのさまざまな状況を映し出すことができ、一般人では見るのできないパイロット目線やシンガポールにはない雪の状況などを作り出し、体験させてもらった。ここではいろいろな状況での離着陸や機体の操縦などを学んでいるようだった。

これらの見学の後、男性と女性の在学生の2人と交流させてもらった。それぞれの方が機械に関係のあるクラブに入っていて、男性の学生は自分たちが作ったロボットで勝負をする競技のクラブに入っていて自分たちのロボットを持ってきて操作してくれ

た。女性の学生は飛行ロボットのクラブに入っており、実際にロボットを飛ばしている映像やそのロボットから撮った航空映像なども見せてもらった。二人とは少しの間であったが話をするのも出来、男性の方とは日本のアニメが好きとのことで驚いた。

4. おわりに

今回ベトナムとシンガポールで経験できたことは自分にとって大切なものになった。自分にとって足りなかったものは何なのか、これから目指していく目標に必要なものは何なのか、これから自分はどのようにして残りの大学生活を過ごすべきかなど自分のこれまでを見つめ直し、これからの自分はどうすればいいのかを考えていかなければいけないと揺さぶられた。また、参加の目的でもあった「自分の英語力」、「文化の違い」、「海外の大学」についても深く知ることができた。中でも英語力については、新たな課題も見つかった。自分は海外の学生と英語で話すことが全くできなかった。それは相手の言うことが理解できないこともあったがそれ以上に自分の意見を英語にして言うことがどんなに難しいのかが分かった。相手の言うことを理解できても自分の意見を相手に言うことが出来なかったり、理解されていなかったりとコミュニケーションをとることができなかった。自分に足りないのは英語力よりも実際に英語を使って会話をする経験が一番大事でありそこを身に付けていくべきだと感じた。

今回のプログラムで得ることのできた経験はこれからの将来に生かしていくとともに、今回見つけた自分の出来なかった課題を克服していきたいと思います。今回のプログラムに参加させていただきありがとうございました。



図 管制塔シミュレーター

(URL : <http://www.ntu.edu.sg/Pages/home.aspx>)